

実践教育から学ぶキー・コンピテンシーの可能性

大澤 香奈子

I はじめに

18歳人口の減少と、高等教育機関への進学率の頭打ちが合わさり、さらに「2018年問題」が迫っている。近畿の18歳人口の減少率は他の地域に比べ大きくないとはいえ、短大への進学率は全国的に見て既に2004年から減少傾向が続いている¹⁾。そのような中であって、真に社会に求められる短大教育を改めて考えていかなければならない。

京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科は2005年に「地域総合科学科」の認定を受けた。文部科学省の説明によれば、従来の特定分野を学ぶのではなく、分野を限定しない多彩な科目とコース展開が地域総合科学科の特色の一つである。ライフデザイン学科における多岐にわたるカリキュラムは、ライフデザインスタンダードとライフデザインプロフェッショナルに大別される。前者は基礎教養に当たる学びであり、後者は分野教育、専門性を深める学びである。この後者の学びの中の一つにファッション分野が設けられている。幅広い分野の学びが可能なカリキュラムの下で展開される分野教育において、専門性向上や学びの体系化は容易ではなく、ファッション分野教育も例外なくそのことが課題としてある。近年その学びの充実を図ろうとして積極的に取り組んでいるのがPBLや企業、地域との協働といった実践教育である。これについて実践的専門教育という視点からの成果や教育効果については既にこれまでに発表している^{2,3)}。ここでは実践教育における学びが専門性を深めると同時に、その学びが汎用できる力となって社会に生かされる教養を育成したいとする、専門分野教育を通じた教養教育をも目指している点に焦点を置き、専門分野教育の中で展開される実践教育、企業や地域との協働プロジェクトを事例に、その学びを通じたキー・コンピテンシーの育成の可能性を検討したい。

II 事例「スマイルプロジェクト」

プロジェクトの概要

「スマイルプロジェクト」は一般社団法人三世代生活文化研究所（以下、研究所）が京都でスタートさせたプロジェクトである。これは、三世代のつながりと絆を築く機会の創出によって相互理解を深めるといって、三世代の交流をコンセプトとしたファッションショーの企画プロジェクトであり、2014年度は4回目のファッションショーとなる。単なるシニア・ファッションショーの企画ではなく、若い世代が祖父母世代とのコミュニケーションを重ねながら、協働でのものづくりを実際に経験し、装いを通じた喜びや豊かさを再認識していくというものである。2014年度はこのプロジェクトはこれまでにない形で、京都、東京、仙台の3都市で展開されるものとなった。

ライフデザイン学科では2014年度にこのプロジェクトに参加し、京都を担当した。このプロジェクトには正課外で取り組むこととなり、3名の学生が参加、教員1名がサポートに当たった。3名の学生はファッションへの興味を多少なり持っている学生である。プロジェクトの中で学生たちが担う役割はデザイナー役である。その学生たちがデザイン・ユニットを成し、「グランマ」と呼んでいるシニアモデルのファッションをデザインする。このデザイン・ユニットは、京都、東京、仙台の3都市で結成され、各デザイン・ユニットがそれぞれの地域のグランマたちのファッションをデザインする。世代間交流を行うプロジェクトであると同時に、地域間交流が併せて行われるプロジェクトとなっている。また、デザインした作品の制作を各地のオーダーサロン等が担うことで、学生たちは服作りのプロセスに直に接し、プロとして活躍する技術者との交流を含め、ファッションビジネスの一端に直に触れることができる。

5月中旬にキックオフ・ミーティングが開かれ、プロジェクトの趣旨、自分たちに期待されている事、課題などの説明を受けた（図1）。以降、グランマとの

交流を図るために、月に1度研究所で開催される服飾勉強会「蓮」に参加するなどした(図2)。そこではグランマからファッションアイテムやデザインについての要望などをうかがった。学内では並行して具体的なデザインを検討するため、週に2時間程度のミーティングを約3か月間重ねた。プロジェクトのスケ



図1 キックオフ・ミーティングの様子
スマイルプロジェクト開催の趣旨を伺った



図2 スマイルプロジェクトの参加者が集まる
服飾勉強会「蓮」

ジュールを表1に示したが、8月下旬から9月初旬にかけて制作を担うオーダーサロンを訪問し、素材について大量の生地サンプルを見せていただきながらアドバイスをいただいた(図3、図4)。デザインしたアイテムごとに素材の選定、コーディネート提案までを整えて、9月中旬に研究所とグランマたちにデザイン提案を行った(図5)。提案した10コーディネート、23アイテムの内、7コーディネート15アイテムが最終的に採用され、10月中旬から制作に入った。2014年度のスマイルプロジェクトファッションショーのお披露目は、2015年2月21日「スマイルプロジェクト共催 第2回北いわて学生デザインファッションショー in 二戸」にて行われた。加えてライフデザイン学科学生作品展においても展示およびファッションショー形式での発表を行った。



図3 企業で見せていただいた素材サンプル帳
学生にとってサンプル帳を見ることは初めての
ことだった

表1 2014年度スマイルプロジェクトへの取り組みスケジュール

時期	取り組み内容
2014年4月	スマイルプロジェクト参加の打診
2014年5月	キックオフ・ミーティング
2014年6月-8月	学内ミーティング(デザインの検討から決定まで)
2014年7月末-8月上旬	制作担当企業訪問(素材の検討)
2014年8月下旬-9月初旬	制作担当企業訪問(素材の選定)
2014年9月上旬	デザイン提案プレゼンテーション準備
2014年9月中旬	デザイン提案プレゼンテーション
2014年10月	モデル決定、制作担当企業訪問(制作打合せ、モデル採寸)
2014年12月	制作担当企業訪問(仮縫い立会い)
2015年1月	縫製上がり、仕上がり、フィッティング確認
2015年2月中旬	コーディネート・チェック
2015年2月20日-21日	岩手県二戸市でのファッションショーイベント参加



図4 技術者からデザインと素材についてアドバイスをいただく



図5 デザイン提案のプレゼンテーション

Ⅲ 期待できる教育的効果

Ⅲ-1 ファッション分野教育からの視点

デザイン・ユニットはデザイナー役としてデザイン企画を行うのであるが、今回はあらかじめ決められた「Journey - 旅 -」をテーマに「2015A&W Collection」作品としてデザインを提案した。このテーマは3都市共通のものである。具体的な作業に入るに当たり、最初に、商品（デザイン）企画における流れとコンセプトの重要性について説明した。グランマの要望や意見を踏まえ、自分たちがデザインするもののイメージを話し合った結果、コンセプトを「きれいに立っていきくなる服、動いてみたくなる服」に決定した。デザインのポイントとしては、品のあるデザイン、甘くない可愛らしさ、自然の色彩調和を着るという3点を設定することを決めた。特に色彩は自然にある色鮮やかな草花や鳥の飾り羽にあるような大胆なコーディネート

も提案していきたいとの考えである。シーズンは秋冬との指定があり、これを更に初秋～秋、晩秋、初冬、晩冬の4期に分けてデザインを検討し、旅行の道中の移動を想定したカジュアルなコーディネートから、旅先での特別な夜を想定したエレガントなコーディネートまでをデザインすることにした。このような内容な既に設置されているファッションビジネスにかかわる講義科目において扱っているのだが、それをリアリティをもって実際に作業することになる。

決定したコンセプト、デザインポイントに沿ってよいよデザインをしていくわけだが、ここで次の課題が出てきた。デザインイメージをデザイン画で表現することは学生たちにとって簡単にいくものではないということである。このプロジェクトに参加した学生は、1名を除いて、ファッション分野の科目の多くを履修していなかった。そのため衣服の構造やさまざまなディテールが生み出す効果を知らず、自分のデザインイメージをなかなか固めていくことができなかった。この課題はミーティングを重ねて解決する他は無かったが、回を追うごとに学生たちの成長が感じられ、デザイン提案時には学生たちはしっかりと「自分のデザイン」を意識している様子であった。

制作が決定したデザインについては、着装者となるグランマが決まり、オーダーサロン等での制作打合せが行われた（図6、図7）。その際に学生たちは、着装者の身長、体型を考慮したデザインの細部のバランス調整やパターンについて、制作を担う技術者から話を伺い、デザイン画のイメージ通りに服をつくり上げる難しさを痛感していた。切替え線の位置、衿ぐり幅や深さ、カフス幅、ポケットの大きさや位置、ボタンの種類や大きさなどすべて一つ一つ検討し、決めていかなければならない。その作業を経るにつれ、学生たちは「自分のデザイン」へのこだわりを強くし、仮縫い時には微細な調整にも意識が向けられるようになった（図8）。



図6 制作担当者とモデルを交えた打合せ
デザインイメージを壊さないように、コミュニケーションを取りながら作業する様子



図7 制作担当者との打合せ



図8 仮縫い時に入念に細部を確認する様子

Ⅲ-2 教養教育からの視点

社会で求められる基礎的な力を身につけるといことを考えた時、このプロジェクトの主旨でもある異世代間の交流は大変重要であると考え。企業が学生に求める力の上にコミュニケーション力が挙げられているが、このコミュニケーション力とはまさに年齢差の幅の広い、いろいろな年齢層の相手とコミュニケーションが取れ、対人関係が構築できる力であろう。グランマとの交流を図る場となった服飾勉強会「蓮」には各回5～7名程度のグランマが参加されていた。本プロジェクトは、グランマに、プロジェクトを主催、コーディネートするスタッフ、制作を担当するスタッフを加えると、学生にとっては祖父母世代、親世代の相手が揃っていることになり、異世代とのコミュニケーションの機会が豊富であることも教育的観点上魅力である。

制作に続くデザインの決定に併せてモデルとなるグランマが決定され、デザインした学生とモデルのグランマとのペアが誕生した。制作打合せでは、学生はモデルのグランマと共にオーダーサロン等を訪問し、必要に応じて制作スタッフに説明と要望を伝えなければならない。しっかりとした意思表示をしなければ自分の意図しない方向に進んでしまうこともありうる。周囲の意見を聴き、要望を取り入れながら臨機応変に対応できるといったコミュニケーション力が必要なのだが、これも学生にとっては難しいものであった。周囲に遠慮して（周囲の勢いに負けてしまっているのかもしれないが）、あるいは知識の不足から発言できないという状況も見受けられた。こうした場合には教員が介入しサポートを行った。「蓮」をはじめ、プロジェクトを通じて表面的なものに止まらない異世代とのコミュニケーションの経験が積まれることは大きな教育的効果を持つと思われる。

2014年度のスマイルプロジェクトのファッションショーは「スマイルプロジェクト共催 第2回北いわて学生デザインファッションショー in 二戸」として岩手県二戸市で行われた。ファッションショー前日にファッションショーの会場で初めて3都市の学生デザイン・ユニットとグランマが一堂に集まった。ここでの学生たちの役割は裏方である。フィッティングのお手伝いや本番前の衣装のアイロンがけなど、できることは限られている（図9）。二戸では、積極的な声掛



図9 本番前に衣装を整える学生たち

けや笑顔、できることを見つけて主体的に「参加する」ことの大切さを学ぶ機会ともなった。プロジェクトに取り組む個々の意識と姿勢によって、ファッションショーを終えた際に感じる達成感や喜びは大きくも小さくもなるであろうが、ファッションショー当日、ショーを終えた直後の学生たちの晴れやかな笑顔は、共に作り上げてきた仲間との喜びと達成感に溢れたようで印象的であった(図10)。こうした経験もまた貴重な学びである。二戸でのファッションショーの様子は地元紙に大きく取り上げられ、思いがけずファッ



図10 ファッションショーの成功を喜ぶ学生とグランマ

ションショーのフィナーレで学生がグランマモデルとともにステージに立っている写真も掲載された⁴⁾。新聞掲載は学生たちがこれまでの取り組みの成果を目に見えるかたちで実感できるものでもあった。正課外での取り組みであれば一層、取り組んできたことに対して外部評価を受けるなど、学生自身が成果を感じることも大変に重要なことである。

IV 成果と課題

スマイルプロジェクトにおいて学生たちがグランマたちと共に作り上げたファッションは、実際に商品展開することを前提に仕様が決定された。以後は制作を担当したオーダーサロン等でのデザインサンプルとして利用いただく予定である。プロジェクトへの参加を通じ、学生たちは自らデザインしプランニングしたファッションが実際にかたちづくられるプロセスに立ち会うというだけでなく、真に上質な素材にも直に触れ、技術者とともに作品をつくり上げていくような貴重な学びを体験することができた。ファッション教育においてこの上なく有意義な実践教育である。参加した学生は「これほど楽しんで取り組めるとは思っていなかった。今後の活動が楽しみでならない。」と感想を述べている。サロン等のスタッフも単なるビジネスとして制作を担うのではなく、学生たちが人と人との繋がりによって成るものづくりに触れ、学ぶことに意義を感じておられる様子であった。

ファッション分野のカリキュラムを見ると、正課科目では、素材、デザイン、構成についての学習が個々に、いわば点の状態で開催されており、科目間の関連性を認識することが難しい。しかし、それらを横断的に一連のプロセスを経るプロジェクトであれば、それを理解することも可能となる。また、分野教育を通じた教養教育の可能性を大きく感じさせるものであった。こうした取り組みの正課科目化を検討したいわけだが、企業、地域の協力を得るにしても、大学が中心となりこうしたプロジェクトをコーディネートできるかどうか、教育目標および達成目標の明確化、継続性の担保、協力先からの十分な教育的配慮が得られるかどうかなど、いくつものハードルがあることも事実である。良い学びのかたちを、スマイルプロジェクト参加から得られた成果をふまえてさらに検討していきたい。

V おわりに

専門分野教育が基礎科目から応用科目へと段階的に学ぶことが適わない中であっても、企業や地域との協働プロジェクト実施を通じた実践的な専門教育の展開の可能性を実感することができた。また、専門的知識やスキルを深めることと、社会に求められる教養を身につけることは繋がりのあることなのだ改めて理解するに至った。スマイルプロジェクトは、専門性を深めるといふ学びの効果が期待できただけでなく、学生たちが立場の異なる関係者たちとコミュニケーションを取りながら責任ある役割を果たしたことに、社会人基礎力⁹⁾という言葉に説明されるようなキー・コンピテンシーの育成にも大いに働いたのである。学生たちの自由な発想と自分自身で創り上げてゆくこだわりを見ると、学生たちが個々に持っている感性の一端を引き出すことができるかもしれないと期待も湧く。こうした実践的取り組みの中で、学生自身がものづくりの喜びを得て、積極的に学ぶ姿勢にその教育効果を期待している。

謝辞

スマイルプロジェクト参加に当たり、一般社団法人三世代生活文化研究所から多大な教育支援を賜った。深謝いたします。併せて関係各位に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 我が国の高等教育の将来像（審議の概要）平成 16 年 9 月 6 日 中央教育審議会大学分科会
文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04091601.htm
- 2) 大澤香奈子、井川啓、地域総合科学科における実践的専門教育の試み－企業・地域との協働プロジェクトを事例に－、繊維製品消費科学会誌第 56 巻 第 2 号、pp.10-14 (2015)
- 3) 大澤香奈子、女子大学生の感性と企業の商品企画、（一社）日本家政学会被服心理学部会 平成 25 年度第 30 回夏季セミナー講演要旨集 (2013)
- 4) 岩手日報 21 面 地域、2015 年 2 月 22 日

- 5) 経済産業省が提唱する「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>